

II 特別連載 II

科学技術 振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第291回

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による海外からの渡航制限のため、さくらサイエンスプログラムでも招へいが実施できない状況が続いている。科学技術振興機構(JST)では、これまでの交流により醸成された海外の送出し機関と日本の受入れ機関の良好な関係を継続させるため、また新たな交流に向けた準備のために、各機関によるオンラインプログラムへの支援を続けている。今回は山口大学とJSTが実施したオンライン高校生交流プログラムについて紹介する。

山口大学の活動報告



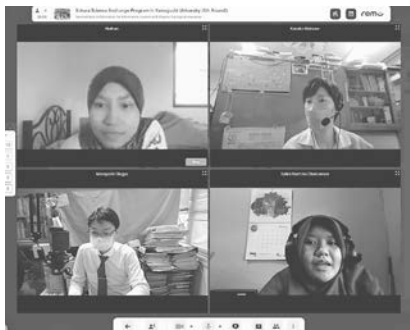
執行 正義 山口大学大学院創成科学研究科農学系学域農学系学域教授

アジア6カ国・地域との遠隔国際交流プログラム

山口大学大学院創成科学研究科農学系学域では昨年10月9日〜11月6日、さくらサイエンスプログラムの支援により、6カ国・地域(タイ、ベトナム、インドネシア、台湾、スリランカ、ミャンマー)の学術交流協定校である18大学から計98名の学生などを対象に遠隔国際交流プログラムを実施しました。



株花の海バーチャル見学会



Remoによる交流会

8回目はJapan Dayと題し、2つの特別講演とバーチャル見学会を実施。1つ目の講演は、本学から米国ケンタッキー州立大学へ派遣留学中の松永愛氏(人事課主任)に同国の大学教育制度を紹介いただくとともに、本学のアメリカ人大学院生を交えた討論会を行いました。多くの先進事例を学ぶことができ、山口大学の教育システム改善にも有用なイメージが掴めました。2つ目の講演では、本学農学部の柳由貴子准教授より山口県の国定公園・天然記念物になっている秋吉台を土壌学的な視点から秋吉台を詳しく紹介して頂きました。秋吉台の成り立ちを学ぶことから自然環境保全の重要

我々はこの20年間に様々な国際拠点交流事業を通じて、ASEAN諸国の約40大学と生物資源を用いた共同研究を実施しており、熱帯性環境生物の資源開発に関する国際ネットワークの形成を推進しています。この度は、特に訪日経験がない学生や教員を対象に交流計画を立て、コロナ禍で留学の機会が閉ざされた交流協定締結校の関係者に本学の雰囲気と教員の研究内容を知ってもらう機会になればと思います。10月9日の初回には、宮田農学部長の開会挨拶を皮切りに開会式を開催し、オリエンテーション、さらには、九州大学名誉教授の伊東正一博士(農業経済学)に基調講演をお願いしました。グローバルな視点からみた食糧需給状況を健康食の普及と併せた理論展開がなされるユニークな講演内容に多くの質問が寄せられました。その後の交流会には伊東先生にも参加頂き、対面の雰囲気に近い形での意見交換ができました。その後、3〜8回目からは特別講演とポスター発表者のショートトークを組み合わせてイベントを実施し、総計261名が参加してくれました。世界各地からの講演を依頼できる遠隔交流の利点を活かし、トルコ、台湾、アルゼンチン等、そして国内から著名な研究者に最新の研究成果等を紹介して頂きました。ポスター発表には、21の研究課題がエントリーし、ベトナム国家農業大、カセサート大、ボゴール農業大などから、それぞれ多数の大学院生や教員が近年の研究成果を発表しました。その中で、優れた研究成果を上げていた2名に優秀ポスター発表賞を授与しました。8回目はJapan Dayと題し、2つの特別講演とバーチャル見学会を実施。1つ目の講演は、本学から米国ケンタッキー州立大学へ派遣留学中の松永愛氏(人事課主任)に同国の大学教育制度を紹介いただくとともに、本学のアメリカ人大学院生を交えた討論会を行いました。多くの先進事例を学ぶことができ、山口大学の教育システム改善にも有用なイメージが掴めました。2つ目の講演では、本学農学部の柳由貴子准教授より山口県の国定公園・天然記念物になっている秋吉台を土壌学的な視点から秋吉台を詳しく紹介して頂きました。秋吉台の成り立ちを学ぶことから自然環境保全の重要



SMAN 70
Jakarta 高校か
ら15名(2日目
は13名)が参加
した。1グルー
プ日本の生徒2
〜3人、インド
ネシアの生徒2
〜3人で、全体
を6グループに
分け、英語で交
流を実施した。
事前に課題が与
えられ、Padlet
(オンラインコ
ミュニケーショ
ンツール)を使
い、個人または
グループメンバ

推薦による
ネシア教育省の
推薦による
SMAN 70
Jakarta 高校か
ら15名(2日目
は13名)が参加
した。1グルー
プ日本の生徒2
〜3人、インド
ネシアの生徒2
〜3人で、全体
を6グループに
分け、英語で交
流を実施した。
事前に課題が与
えられ、Padlet
(オンラインコ
ミュニケーショ
ンツール)を使
い、個人または
グループメンバ
ログラムの目玉である Remo によるバーチャル交流会を行いました。様々な国の教員や学生と意見交換ができ、日本への長期留学を考え始める学生がいることが分かりました。今回、さくらサイエンスプログラムから御支援頂いたことで、多くの大学と「熱帯生物資源」や「情報解析」を主たるテーマとして総合的に学習・議論する交流することができました。この度の一連の成果情報は英文報告書として取りまとめ、既に各協定校と共有済みです。最後に、協力頂いた皆々様に感謝申し上げます。

日本・インドネシアの

高校生によるオンライン交流プログラム

JST さくらサイエンスプログラム推進本部

科学技術振興機構(JST)は1月27日及び2月1日の2日間にわたり、立命館高等学校(京都府)とインドネシアジャカルタの高校の間で「オンライン高校生交流プログラム」を実施した。写真。

さくらサイエンス・ハイスクールプログラムでは、毎年約1000人の海外の高校生を日本に招へいしてきたが、コロナ禍で招へいできないため、昨年度から日本と海外の高校生の交流をオンラインで実施している。2020年度よりこれまでに4回に亘り開催してきたおり、最初の3回は双方向ワークショップ形式のプログラムとしてきたが、前回以降発表、質問、意見交換等の交流に重点を置いた内容のプログラムとして実施している。今回は、立命館高等学校から15名とインド

性を実感することができ、海外からの参加者に我が国固有の観光資源としての立ち位置を順序良く理解して頂くことができました。バーチャル見学会では、西日本最大級のシステム農場である(株)花の海の様子を動画で紹介。また、宇部市にある山口県産業技術センターも紹介し、日本酒の醸造に係わる先端工学技術を学んで頂きました。さらに、Incubate を使って、山口大学や周辺の観光スポットの動画紹介サイトを準備し、視聴してもらいました。

1月29日の最終日の最後の企画として、プ

1とリアルタイムで協働作業し、準備した。

1日目は「メンバーと仲良くなるう」をテーマに、各人が自己紹介と自国紹介を行った後、「SDGsと自分の国」として、SDGsの内の3つのゴール(④教育の質、⑤ジェンダー平等、⑬気候変動)の観点から、自国が持つ社会課題について考え、日本とインドネシアの違いや共通点を見つけ、双方が発表した。2日目は「私たちが目指す世界と創る未来」をテーマにプログラムを実施した。グループ内で、2030年の自分はどのようなか想像しながら、2030年の自分になって自己紹介した後、「SDGsと私」として、SDGsから関心あるゴールを選び、自分の興味や解決したい社会課題をグループメンバーに発表。最後に「私たちが創る未来」として、自分たちが描く理想の世界や自分たちが変えたいことをグループ内で議論し、まとめたことを他のグループに発表した。

プログラム最初の自己紹介、自国紹介が終わった頃から緊張がほぐれ、お互いに理解し合おうとしている様子が見られ、有意義な国際交流となった。プログラムを通じて、「SDGsについて理解を深め、よりよい未来のために自分たちに何ができるか、アクションを考える機会になった」「インドネシアと日本を比較し、文化、考え方など似ているところや違うところを理解できた」「一緒に協働作業をしたことにより、インドネシアがこれまでより身近な国になった」などの感想とともに、「もっと英語力をつけたい」など英語について意欲的な感想も寄せられた。

さくらサイエンスプログラムでは、これまで招へい交流事業を中核として実施してきたが、これに加え、オンライン交流の特長を活かしながら一層効果的な交流事業が実施できるように進めていく。